

## 会員紹介：大嶋清治さん

### 私の略歴



1973年4月、東京大学工学系大学院精密工学科修士課程卒業。郷里大分に帰ることなく、政府機関の通商産業省に就職。工業技術院技術調査課を皮切りに、通商関税課、OECD代表部、中部産業局商工部長、医療福祉機器技術企画官、標準部課長を歴任。広島中国通商産業局長勤務を最後に退官。1999年7月にアジア生産性機構工業部長に就任、その後、日本ブランド協会を経て、2004年4月に国際連合工業開発機関東京投資・技術移転促進事務所（UNIDO ITPO 東京）の代表に就任。2009年より現在まで（一社）研究産業・産業技術振興協会に専務理事として勤務。

### 従事した仕事の内容

#### 通商産業省

最初に配属されたのが、工業技術院技術調査課であった。産業技術動向やテクノロジーアセスメント、そしてエネルギーショック後の新しいエネルギー技術への取り組みとして、サンシャイン計画等の立ち上げ議論に新米としての手伝いから仕事を開始した。

この頃は、日本の産業も多きく成長し、机の上にはうず高く積み重ねられていた欧米からの技術導入審査も終わりの頃で、そろそろ日本としての独自の取り組みをなすべく議論がなされていた。その中で、日本の技術についても開発途上国への移転を本格的に取り組むべきとの議論が起こり、故大来先生を慕う諸先輩の田村修二氏、和田正武氏、島田仁氏等が、工業技術院の組織の中に担当の新しい室を作ろうと熱心に努力され、その結果、国際研究協力官室（ITIT室：Institute for transfer of Industrial Technology）が誕生した。初代室長には、技術系は残念ながらなれなくて、事務官で元環境大臣、元外務大臣も務めた川口順子氏が就任され、活発な業務が開始されていったものである。

#### （SRID との出会い）

上記活動の一環として、国際開発の研究に携わる者が、個人レベルの活動に留まり、一匹オオカミ的に、国際社会の中で孤軍奮闘しているのではなく、広くお互いに交流し、励ましあっている、日本のプレゼンスを高めていく事が求められているとして、故大来先生を担いで、SRID 設立に向けての動きが加速された。海外コンサルティング企業協会（ECFA）の方や国際開発問題を研究する財団の方々と諸先輩が SRID 設立に熱心に動かされておられ、その内のお一人の田村修二氏に小生はお誘いを受け、SRID に関与したのが、当協会との出会いである。

この時に、ECFA に萩原氏、藤村氏もおられ、また国際開発問題を扱う財団に堀内元大使もおられ、いろいろと熱心に活動したものである。当時、SRID 事務局には、妙齢の知的ですばらしい女性達がおられ、明るく人間味豊かな雰囲気があふれていた。萩原氏は、そのうちの一人を射止められ

うらやましく思う次第である。萩原氏とは、その後運命的な再会を果たすが、その時にも、奥様と仲良く国際活動と一緒に活動され、再度うらやましく感じた次第である。

### (フランス留学)

1976年6月に、人事院給費留学生として、フランスに2年間出かける事となった。九州の田舎育ちの私が、留学できるとは、夢のようである。両親は、外国人と一緒にになったら大変というので、急遽4月末に見合いをし、あっという間に、話が進み、6月に結婚式を挙げ、その翌日にパリに向けて出発という慌しさであった。「マッサン」の朝のNHKのテレビ番組がその頃放送されていたれば、両親も別の考えを持つかもしれない。私の長女は、国際結婚となったが、両親とも、長女の伴侶となったスイスの男性は、温かく迎え入れている。鬼畜米英の時代は、昔と比べると大きく変わったものである。

パリに着いたら、先輩の田村修二氏が、パリのOECD勤務で、暖かく迎えに来てくれたのには、感激であった。予約したホテルが満室で入れず、荷物を持って別のホテルに移動させられたのには、少し動揺したが、心温まる迎えと楽しい食事をして、初日を過ごしたのが懐かしい。

数日パリで過ごして、その後、フランス語教育のメッカといわれているブザンソンに移動し、たどたどしいフランス語を少しでもまじなものにすべく努力したが、日本と比べて全てが新鮮で、小さな町を歩いて回り、ローマ人が築いた城塞の跡も見て回った。その後、モンペリエ、グルノーブルと移動したのちに、再びパリへ戻り、フランス国立行政大学校(ENA)の外国人学生として、1年強在籍した。

ENA在籍の間、モロッコに外国人学生全員招待されて訪問したり、フランス語圏のカナダのケベックヘローヌ工科大学校の生徒として夏季コースに参加したり、ナンシーの町に副知事待遇として3ヶ月勤務したりして、充実した日々を過ごした。

つらい思い出としては、購入した車が路上で突然エンストとなり、山と積んだ荷物を抱えて往生、道で犬の糞を踏んで気がつかず家の絨毯が汚れる、出てきたワインがお酢になっていて困難もあったが、幸いに盗難と事故には合わずに無事に帰国できた。

フランスは、自由、平等、博愛の精神の優れた国と言われるが、貧しいアジアの給費留学生の目で見ると、自動車のルノーの工場では、現場にはフランス人は誰もいず、働いているのは、アフリカ系かアラブ系の移民の人ばかり、郵便局や区役所に行くと、勤務時間終了の前に突然幕が引かれ、後は明日と言って、待っている人の事は一切知らず、道路にごみを捨てて平気、働き先の職場の選択は、労働許可証の仕組みで雇字掬めとなっており、ブルジョワの間での自由、平等、博愛であった。ルーブル美術館やシャンゼリゼ通り等の素晴らしい面だけでなく、暗い影の面も目に付いた。どの世界にも光と影の両面がある。但し、フランス人の個性や人間らしさには、引かれるものがあった。

## ガット東京ラウンド

1978年に帰国すると、海外留学経験者は、国際関係の仕事が割り当てられるようで、通商関税課に配属となり、難しいアンチ・ダンピングコードの交渉と関税交渉の手伝いをする事となった。米国は、アンチ・ダンピングを頻繁に発動でき、ダンピング金額も発動国側で決められる仕組みを提案してくるのに対し、日本は、当時は、発動は殆どなく、発動される側であり、如何に恣意的な発動を無くさせるかのポジションで、論理の戦いをした事を思い出す。結局は、米国に押し切られた決着で、補助金相殺関税の方でルールが決まり、それと同様の規定をダンピングにも適用となり、私の小さな努力は実らずじまいであった。今になると、中国の安い製品が国内市場からあふれ出て、日本に押し寄せる状況では、日本も発動国の発想も必要である。

関税の交渉は、スイスフォーミュラによる税率の引き下げと、例外品目の交渉であった。どうして例外品目とするのか、相手の国にとっても例外が受け入れられるような理屈を展開せねば、相手国の当事者に話を聞いてもらえないから、相当に苦勞である。調整に徹して、どちらかを降ろしてまとめるとすれば、相手の国をおろすか、日本をおろすかどちらが容易かを考えて、行動する人も出てくるのは、止むを得ないのかもしれない。当時は、工業製品の関税引き下げが中心であったが、今は、サービスや農業が中心となっているのも時代の変遷を感じる。

## OECD 代表部

1988年6月から平成3年6月まで3年間、パリのOECD代表部に勤務した、代表部とは、国際機関に対する政府の出先機関である。ちなみに、大使館は、各国に対する政府の出先機関である。OECDは、欧米に日本を加えた共産圏以外の先進国の集まりであり、自由主義陣営の結末の場でもある。今は、ソビエト連邦が崩壊し、位置づけは、変わってきている。私が赴任した時は、まだソビエト連邦が存在し、ベルリンの壁も存在していた。

代表部は、大使は外務省からであり、私にとって最初の大使は、皇太子妃のお父上となられた大和田大使であった。代表部には、大蔵省、通商産業省、農林省、厚生省、運輸省、環境庁等からの出向者がいて、それぞれの専門分野の委員会を担当している。私の担当は、科学技術政策委員会、通信情報政策委員会にIEA（国際エネルギー機関）のエネルギー技術政策委員会と個別のエネルギー技術の実施協定であった。

冬のクリスマスシーズンと真夏のシーズンは、委員会活動は無く、書類の整理時期であるが、春、初夏、秋は、委員会が活発で、東京からの出張者も多く、特に科学技術政策委員会では、副議長として、元東大総長の吉川先生が日本を代表して毎回参加され、個人的にも大学の精密機械学科で講義を受けたことのある恩師であり、気を張り詰めて仕事をした。新しい議長選出の際に、代表部としては、吉川先生を是非次期議長にと思い、大使にも話をし、各国に根回ししたが、丁度、先生が東大総長に就任が確実となり、急遽候補から辞退した事が記憶に残る。

## 国際開発と関わる

(アジア生産性機構勤務)

OECD代表部勤務を終えて帰国してからは、通商産業省（現在の経済産業省）に復職し、中部産業局商工部長、医療福祉機器技術企画官、標準部課長、そして広島にある中国通商産業局長勤務を最後に長い役人生活を終了し、1999年7月にアジア生産性機構工業部長に就任した。

アジア生産性機構は、職場における生産性を高める運動を推進する機構で、Kaizen、5SやPDCAサイクル等の活動を、アジアの国々と協力して展開する事を使命としている。中国等の共産主義の国は設立当初は入っておらず、共産主義の拡大を阻止し、自由主義の陣営強化の意味合いも持っていたと思われる。

日本のメンバーは、日本生産性本部であり、アジア生産性機構トップの事務局長は、最大の拠出国かつ設立のイニシアティブをとった日本の指定席となっており、外務省から元大使が歴代就任している。アジアの国々を随分訪問し、委員会活動を実施させていただき、有り難い経験をしたが、ボトムアップの組織構築という意味で意義深いものがある。しかし、役所時代と比べて、使命感をもって仕事をしている人とあまり出会わず、また先端技術に関心を持つ人は少なく、知識を身に着けるとさっさと辞めていく人も多く、残念であった。2年間ほど勤務して、2001年6月に退職した。

#### （日本プラント協会）

日本プラント協会の英語名は、JCI（Japan Consulting Institute）とあって、JETROができる前から、世界各国に支部を持ち、日本の海外への輸出の草分け時期から活動し、商社、プラントメーカー、エンジニアリング企業などを会員とする歴史のある団体である。

私が、1984年に製造産業局通商課課長補佐でプラント班長を務めていた頃は、延べ払い輸出は、許認可の対象であり、国際協力銀行の輸出信用とカントリーリスクに対する貿易保険とを一緒にして、三位一体の運用をしていた。JCIは、民間の企業と一体となって案件の形成、振興をしており、毎日のように、JCIの方と意見交換をしていたので、知見のある組織であった。当時は、OECDの輸出信用ガイドラインの紳士協定に沿って、国際協力銀行の延べ払い輸出の条件を厳しく決めていた。但し、他の国、例えばフランスの国等が紳士協定に沿わない条件を提示しているとの情報を入手すると、相手国に確認の電報を打ち込み、結果を踏まえて、マッチングも行うとの張りつめた雰囲気の仕事をしたが、私が、JCI勤務を開始したころは、昔とは様変わり、3身一体の制度は無くなり、役割も大きく変化していた。

勤務開始当時は、地球温暖化ガス削減問題への対応がホット・イシューであり、京都議定書での日本の削減義務を達成するために、国内での削減努力では不足で、国際的な枠組みによる削減のJIとCDMが注目されていた。CDMとは、クリーン開発メカニズムの略称であり、最先端のプラント等を設置すると、通常と比較して、温暖化ガスの削減がなされるので、その量をプラント輸出国の削減量にカウントできる仕組みである。

発電プラントやエネルギーを大量に使用するプラントでは、CDMメカニズムの活用が可能であり、このCDMメカニズムに沿った案件審査を行う機関として、国際的に審査をクリアし、日本プラント協会を再生させる事を第一の目標として仕事をした。

審査機関として国際的に登録できるためには、厳密な国際審査に耐え抜く事が必要であり、そのためには、先ず、国際審査に審査員として参加するJABの専務を説得する必要があった。しかし、プラント輸出促進の機関が、同時に中立的な判断を求められる審査も行うのに対して懐疑的な質疑があり、ホットな意見交換を何回か重ね、JCIの中に独立した機関としてCDMセンターを設置する事とした。平成13年7月より2年間で、膨大な量の英語の資料作りをして、設立の目途を立てた。(その後、JCIは、このCDMセンターの活動を中心に展開するが、2012年議定書に基づくCDMメカニズムが終了し、JCIは、その役割を終えて、2014年解散した。)

#### (UNIDO ITPO 東京事務所)

2004年4月に、国際連合工業開発機関東京投資・技術移転促進事務所 (UNIDO ITPO 東京) の代表に就任した。この時に、嬉しいことに、SRID創設時に一緒に萩原氏が既に勤務しており、再会を喜ぶと同時に、いろいろと教えて頂いた。お礼申し上げたい。そして、この事務所勤務を契機に、SRIDの活動に復帰させて頂いた。その後、SRID代表も務めさせて頂き、萩原氏もその後しばらくして代表に就任している。



マリのジャトロファを栽培  
村人、日本人の左端が筆者

ITPOとしては、日本の東京の他に、フランス、イギリス、イタリア、ベルギー、ロシアに各国拠出の支部があった。ITPOでは、世界各国より、開発途上国の投資促進庁の職員を中心に投資促進専門官として日本にお招きし、個別の企業を訪問しての商談の他に、シンポジウムを開催した。あるいは、日本からミッションを派遣した。在職中にTICAD4というアフリカ開発に向けての日本政府のイニシアティブで開かれた横浜での首脳級会合にも参加出来た。

援助よりも工業開発をとというのが、アフリカ諸国の願いである。即ち、いくら援助してもらっても、アフリカ諸国の経済状況は良くならなかった、従って、援助はもう要らない、代りに必ず経済活動の上向きに通ずる投資や技術を欲しいと言うのである。アジアは、世界各国の投資を受けて近代化の道を着々と進めているのに対し、アフリカは、依然と同じ暮らしのままであり、何とかして欲しいという切実な声であった。

中国の援助は規模も大きく、多くの国で、当初は歓迎されたものの、舗装道路は一年でガタガタとなり、援助の工事は、現地の人を採用することなく、中国から来た労働者が全てこなし、しか





ガーナのレストランで、先方農林省の高官と一緒に、前列右から二番目が筆者

ダガスカル、モザンビーク、ウガンダ、ナイジェリア、マリ等の国々を訪問し、経済社会の実情を理解出来たのは、今では、貴重な財産である。

も工事が終了しても帰らずそのまま現地において、ビジネスを始め、現地のビジネスを行う人の余地が無くなり、評判は、援助前と後では大きく変わっていたが、今は変わっているのであろうか。こういった事も有り、アフリカの国々は、内戦が終わり、経済が順調な伸びを示してきて、積極的な投資を求めている。内戦がほぼ終了した次期に、UNIDOの機関に勤務できたことは、幸運と言えるであろう。

当時のケニアのアオリ大使、モロッコのレシエヘブ大使等と随分親しくさせて頂いた。

また、日本人としてあまり訪問する事の少ないマ

訪問国の一つのマリは、日本と同じく石油・ガスが産出せず、バイオ・ディーゼルの活用に熱心であり、ジャトロファという乾燥に強く、植物油を高濃度に有する種子を持つ植物の育成に熱心であった。それ故、バイオ・ディーゼル油によるディーゼル発電機の開発に取り組んでいるヤンマーの熱心な方と一緒に、遠くマリの大地を訪問し、長老に先ず挨拶し、その後、NHKの取材の人と一緒に大統領宮殿にて直接に大統領にもお会いできた事を覚えている。このNHKの記者の方は、その後ヨーロッパ勤務となり、時折、テレビでヨーロッパからインタビュー記事を書いているのを見かける事があり、その度マリを思い出す。

アフリカ以外の南米、中央アジア、南アジア等の国々からも、投資促進専門官をお迎えもした。南米ペルーでは、日本大使館の目賀田大使が熱心に活動を展開しておられ、その縁で、名古屋大学の福田教授を伴って、日本のロボット技術を紹介する機会も現地で持った。

UNIDOの本部は、オーストリアのウィーンにあり、日本人スタッフも勤務しているが、拠出割合に比べ、まだまだ低い割合であり、日本政府も候補者の後押しをしている。但し、インド人、ロシア・東欧のグループが一大勢力を形成しておりまた、アフリカ人の候補推薦に際しては、アフリカの大使自ら積極的に動き回るなどがあり、日本人が新しいポストを確保するのは大変である。

#### (一般社団法人研究産業・産業技術振興協会)

2009年5月より、5年間のUNIDOでの勤務を終え、社団法人研究産業協会に勤務する事となった。技術行政が専門の私にとって、念願の職場である。UNIDO時代の経験を活かして、若干BOPビジネスの技術的側面からの活動ということで、汚水のリサイクル技術、高圧処理技術、ソーラーランタン、バイオ燃料等の関連の促進を、南米、東南アジア、モロッコで展開した。一部が具合的ビジネスにつながっているのは嬉しいことである。



マダガスカルの首都アンタナナリボ中央が筆者

協会での主な仕事は、国内での研究開発に関するマネジメント、人材育成、技術交流等が中心であるが、2011年に財団法人日本産業技術振興協会と合併し、現在の一般社団法人研究産業・産業技術振興協会となった。独立行政法人との技術連携を深める仕事を追加し、そして国際的には、世界の類似機関との間で産業研究協会世界連合を2年前に発足させることができた。

企業は、グローバルに展開しており、社団法人もグローバルに展開する時期である。時折メールを送ってくる欧州、米国、豪州、ブラジル、韓国のパートナーとの交流も楽しみながら、仕事をしている今日この頃である。

### 仕事上の苦勞と喜び

関税の交渉は、農産物、革製品等政治的な品目が多く、国会議員、外務省、各省、業界団体と関係者が多く、大きな波に翻弄されながらの一兵卒としての仕事であった。日本の新聞は、日本の提案では米国は納得していないとか、欧州は日本提案に不満とかの記事を書いて、日本政府の対応がまずい様な事を宣伝するが、国が相互に利害をぶつけ合って交渉しているのだから、相手の国が日本の対応を非難するのは交渉事として当たりまでである。フランスの新聞では、相手の国の悪口をガンガン書き立てて、フランスの主張が如何に正しいかを宣伝するのに対して、日本の新聞は対応が全く逆である。日本の交渉者は、個人攻撃にもさらされる。朝日新聞の慰安婦問題の事実に基づかない記事は、日本の新聞、ジャーナリストの世界的恥であるが、こうした日本を悪く言う傾向はその当時もあり、政府の対応を批判するだけで購買部数を増やそうというのは、モラル上ゆゆしき問題ではなかろうかと残念に感じたものである。

関税交渉の場は、スイスのジュネーブであり、延べ半年くらいは、関税課勤務2年間のうちに滞在した。交渉事後のレマン湖畔やアルプスの綺麗な山並み、おいしかったチーズフォンデュの料理等が懐かしい。

OECD 代表部勤務の経験では、IEAのエネルギー技術政策委員会の一場面が記憶に鮮明に残っている。私が臨時の議長役をしたことがあり、その折、委員会で事務局案を説明したのが、日本の通商産業省技官でIEAに勤務していた藤井氏、それにコメントした唯一の委員会メンバーが、通商産業省の工技院ITIT室から出張してきていた高橋氏で、外国人約15人がいる中で、日本人3人が、英語で司会、説明、質問し、欧米の委員がシーンとしてそれを聞いているという場面があった。欧米に追い付け追い越せという時代感覚の中で、嬉しいことに、日本の面目躍如であった。

この時の経験が、後日、気候変動枠組み条約の京都議定書作成の時に、CTI (Climate Technology Initiative) 議長就任につながった。世界中を飛び回り奮闘した結果、京都の大臣出席の本会議場で、CTIと世界の電力会社グループE7等のMOU締結やエネルギー技術の重要性について、議長国である日本の通商産業大臣より発言してもらえ、感激であった。今も、CTI議長を辞めるときに各国の代表から署名していただいた思い出のポスター大の色紙を大事にしている。

## 私の生き方

人それぞれの生き方があるし、時代に応じて生き方も変わるであろうと思う。国際的な側面での生き方として感じるのは、農業文化の中の生き方と狩猟文化の中の生き方の違いである。

農業文化の中で育ち、同じ農業文化の中のパートナーに対しての発言としての世界貢献、世界平和の実現というのは、意味が通じる。しかし、その発言が、狩猟文化の人に対して発せられても素直には受け取られない。特に、アフリカは、西欧列強による植民地支配で昔の国が滅び、民族間の対立も余儀なくされ、今の国境は、自然の境界や民族の境界ではなく、西欧列強の力関係で決まった国である。

木に実がなっているのなら、どうしたら真っ先に他人より先に取って食べるかを長い歴史の中で学んだ文化圏の人に、皆の為に取られない様に見守るという事を教えるのは至難の事である。文化の違いの上に人夫々の生誕、成長の違いによる考え方の違いもある。フランス人は、個性を尊ぶ国でもあるから、10人いれば10の異なる考え方がある。

従って、これからの援助の中心となるであろうアフリカを考えると、国際的な人と人との関係、援助国と被援助国との関係は、日本の社会の中で通用する慈善事業の発想だけではなく、また長い植民地支配の歴史的歪の是正を日本が負うのではなく、未来を目指して、日本と相手の国とが相互に国益を尊重し合い、時には不正な関係にならないように相互に注意しあい、国際的に平等なルールの下で、ウィンウィンの関係を築いていく姿勢が重要だと考える。

人生は、長いようで短い。40年前の事は思い出せるが、これからの40年後には、既に過去の人となる身である。一日、一日を大切に、家族、友人、知人を大事に人の輪を大事にし、何が明日に向かって出来るかを考え、前向きな人生を送って生きたいものである。